

～～中略～～

先生の荒い息づかいが聞こえる。僕は、
「あっ、あっ」
と声を漏らす。

既に太陽は昇っていて、窓から光が差し込んでいた。ベッドが照らされているし、僕も日光を浴びていてじんわりと暑いから、うつ伏せの体勢で、見なくてもわかる。

「出しますよ」

先生は宣言して射精した。終わると早く、先生はさっさと着替えてベッドから出た。先生が僕を呼ぶこともあれば、部屋に来ることもある。今日は後者だった。

「子どもたちより、遅くね」

先生はそう言い残して、部屋から出た。僕は足を広げて、出された精液をシーツにどろっと漏らす。愛の家から拝借したスプーンを肛門に入れて適当に掻き出して、やっぱりシーツに出す。どうせ洗うのは僕。誰も見ない。

精液を出し終わったら、シーツを丸めて、ベッドから剥がす。

～～中略～～

先生は昔、骨董屋を営んでいた。僕はそこの使用人として雇われた。両親が安く売りつけたのを先生が買ったのだ。店は繁盛していたものの、店が扱う品は少し、ニッチな物だった。ついに国が輸入禁止物に指定したため、裏のルートでなんとか禁止物を整理して手に入れたお金で愛の家を建てた。

僕は親から直接榊の元へ渡ったから奉公という形だし、奴隷も国から禁止されていないけれど、先生は僕も整理しようとしていた資産の一つだった。

僕は先生になんとか媚びを売って奴隷商人に売られることは免れた。

僕の初めてはあそこで失われた。

「僕を売らないでください」

必死で先生の足下にすがりついた。そうそう、今は先生と呼んでいるけれど当時はご主人様と呼んでいた。子どもたちの手前無難な先生になった。何の先生ということではなく、子どもが大人を呼ぶときに無難な呼称が「先生」らしい。

話を戻すと、僕は親から先生へと売り渡されたのであって、正式？ な奴隷ではない。つまり奴隷としては商品にならない可能性があるのだ。僕は普通を自称しているので、誰よりも働き者というわけではないし、誰よりも頑丈というわけでもなければ、誰よりも美

しくも無い。そんな平凡な奴隷、誰も欲しがらない。はした金で買う人が現れたとしても、すぐに壊されるのが落ちだ。

先生といたかったのではなく、先生以外の、奴隷を買い付けるような人たちに買われたくなかったのだ。

～～中略～～

だから、僕は覚悟を決めてズボン越しに先生のペニスを両手でやわやわと握って、マッサージしてあげた。玉袋の位置をかくにんして、下からくすぐるようにしてわしゃわしゃと撫でると、先生が

「んっ」

と声を上げて、近くにあった木の丸椅子に座った。先生は大腿を広げて、相変わらず僕を見つめるだけだった。でも、それが続けろという合図だと思った。

僕は両方の玉をさわさわしたあと、肉棒を両手で包み込むようにふれた。手を動かして根元と先っぽをズボン越しに確認した。根元から亀頭へ向かってしごいていく。

「脱がせてください」

先生はそう言って、椅子から少し尻を浮かせた。僕は先生のベルトを外し、チャックを下ろし、ズボンを下ろした。

「下着もです」

下着にも手をかけて下ろすと、先生は再び椅子に座った。下着とズボンを膝くらいに留めておきたかったのにずりおちて足首くらいまでずり落ちたが、先生は気にしていないようだった。

びゅっ。

～～中略～～

「飲んでください」

有無を言わせないその言い方に、拒否することもできずに、ごくと一飲みしてしまった。一飲みは無謀だったのか、僕は何度かむせて咳き込んだが、先生は笑顔のままだった。

「あやうく衣服に漏らしてしまうところでした。上出来です」

「では、売らないでくれますか？」

「そうですねえ。僕のペニスはとっても汚れているので、君のお口で綺麗にしてください」

僕は再びペニスを口に咥えた。

～～中略～～

何度も舌を往復させて、顎も舌も疲れてきた。その間、一滴も唾液を落とさないように何度も何度も飲み下した。

「はい、結構ですよ」

先生にそう言われるまで。

ペニスを口から抜いても、屈んだままのぼくに、すっかり下の衣服を身につけた先生は、「そんなこともできたんですね。知りませんでした」

と先生は笑っていた。僕は先生に弄ばれ尊厳を切り売りしたおかげで、僕は売られずに済んだ。僕は知っている。奴隷商人の手に渡り、奴隷をよく買う人間の手に渡ったらこんなものでは済まない。だから、ぼくは平気だと何度も自分に言い聞かせた。

～～中略～～

紅がもういいと言って、満足するまでずっとおんぶしてやった。

「アカネ」

紅が学習室に行くのを見届けていると、今度は東雲が話しかけてきた。

「どうしたの？」

「ちょっとこっちにきて」

そうやってきた町のおじさんに路地裏に連れ込まれて、立ったままペニスを突っ込まれたことを思い出した。

～～中略～～

そんな時におじさんが声をかけてきた。

僕は奴隷の知り合いもいたから、当然、おじさんの方には行かなかったのだけれど、おじさんの方から近づいてきて、あっという間に連れ込まれたのだ。

こうなったら、搾り取ってやるということで、交渉した。抵抗してもやられるだけだ。商売に持っていく方が良い。

「一発出すなら、銅貨1枚」

そう言うと、頬を殴られた。頭がクラクラして、視界が揺らぐ。

～～中略～～

東雲の色欲は、男を彷彿とさせるには青臭かった。だが、思い出した。

東雲にはまだペニスで人を支配することはできないだろうと判断して、東雲に言われるまま、部屋に入った。

三人部屋には、東雲しかいなかった。実は三人分の個室はあるのだが、誰が言い出したのかわからないが三人がいいと言いだし、三人で寝るようになった。使われていない個室にあるベッドはそのまま。この部屋には新しく二段ベッドを買った。そんなわがママが許されるほど、愛されている。

東雲は、一段の方のベッドに腰掛けていた。

「ペニスが痛いんだ」

東雲はそう言って、ズボンと下着を下ろし、ぼろんとペニスを見せてきた。勃起はしていないが、確かに腫れているように見える。

「触ると、余計に腫れるよ。薬なら、先生に言わないと買ってもらえないよ」

～～中略～～

懐柔すると決めたら、行動は早く。

「やっぱりちょっと待ってて。薬、買ってくる」

「え？」

僕は、内職で貯め続けていたお金で軟膏を買った。

部屋に行くと、しょんぼりした東雲が、まだペニスを露出しながら待っていた。

「薬、塗るね」

僕は屈んで、軟膏を指の先で掬って、東雲の腫れたペニスに塗ってやった。

「ひっ」

「痛い？」

「ううん。びっくりしただけ」

東雲は、顔が真っ赤になっている。見せつけたわりには、触られるだけで赤くなるなんて、かわいい反応するじゃないか。これなら、先生からも簡単に奪えそう。

「もうしまっていていいよ」

僕が言うと、東雲は下を履いた。

僕は外に出て、井戸水と外に置いてある石けんで手を洗っていると、東雲もやってきた。

「はい、これはプレゼント。でも、先生に言った方がもっと良い薬を買ってもらえると思うから、そのときはこれは捨ててね。こんな安物を与えてって僕が先生に怒られちゃうから、先生には言わないで捨ててくれると嬉しいな」

僕は軟膏を東雲に手渡した。東雲の瞳が揺れる。僕は知っている。ペニスが腫れた、なんてことを東雲が先生に言えるはずがないってこと。

僕にも色目を使うってことは、僕にも好かれないと思っているってことで、多分こう言われたらなおさら捨てにくくなるということ。捨ててと言われた物を捨てられないし、嘘をつき通せる器用さもないから、ますます先生に新しい物はねだれないこと。僕は知った上で言っている。

目だけで物を語る東雲だから、色欲に気づきやすい人は東雲が気になると思うけれど、実は三人の中で一番スキンシップが苦手なのが東雲だ。だけど、もう一つ知っている。するのが苦手でされるのが苦手じゃない、むしろしてほしいって思っていること。

ぼくは、そっと東雲の頭を撫でた。

「我慢しないで、相談してね。先生ならなんでも聞いてくれると思うけど、僕も聞くよ」

先生にでもいい。この言葉は呪いだ。こう言えば、目で語るだけで口下手な東雲は何も言えなくなる。